

「知覚の知覚」と「コミュニケーション/行為」が 「主題」にもたらず選択性

—— ニクラス・ルーマンの「相互作用システム」をめぐって ——

芦 川 晋

『中京大学現代社会学部紀要』 第8巻 第2号 抜 刷

2015年2月 PP. 197~228

「知覚の知覚」と「コミュニケーション/行為」が 「主題」にもたらず選択性

—— ニクラス・ルーマンの「相互作用システム」をめぐる ——

芦 川 晋

0. はじめに

ニクラス・ルーマンは自らの社会システム理論を展開するにあたって、「全体社会（ゲゼルシャフト）」、「組織」、「相互作用」という三つのシステム形成の水準を区別している。ここでもっぱら検討の対象としたいのはそのうちの「相互作用」である。というのも、ルーマンはとりわけその初期・中期に相互作用システムの議論を展開するにあたって、大幅にアーヴィング・ゴッフマンのとりわけ『集まりの構造』の議論に依拠している。もちろん、ルーマンの関心は必ずしもゴッフマンのそれと一致しているわけではない。にもかかわらず、ルーマンによるゴッフマン読解を基礎とする相互作用システム論の展開は、ゴッフマンが取り上げた事象をゴッフマンとは違った視点から評価する視座を提供しているように思える。

本論文の狙いは、ルーマンが相互作用システムについてまとめた記述を与えている三つの主要な文献、すなわち「単純なシステム」（『社会学的啓蒙 2』1975）、『社会システム理論』（1984）、『社会の社会』（1997）それぞれで相互作用システムについてどのような議論が展開されているかを要約し解釈を示したうえで、ゴッフマンの議論との異同について検討すること、そしてあらためてルーマンの相互作用システムとはどのようなものか

示すことにある。あわせて、それにより相互作用システムが持っている組織や全体社会との種別性も明らかになるのではないかと考える。

あらかじめ、その要点をまとめておけば、ルーマンは、いずれの時期においても相互作用システムの成立要件を互いに「居合わせること」（「居合わせている／不在である」の区別）としている点では首尾一貫しており、互いに「居合わせること」でもたらされる特異性が相互作用システムの種別性をなしている。互いに「居合わせる」状況では「知覚（の知覚）」と「コミュニケーション（ないし行為）」が並行して進行する。

「知覚（の知覚）」と「コミュニケーション（ないし行為）」の差異のもとをたどればゴッフマンによる「焦点の定まらない相互作用」と「焦点の定まった相互作用」との区別にいきつくようにみえる。しかし、ルーマンが採用する「知覚／コミュニケーション」という区別は、一部での指摘とは異なり、必ずしもゴッフマンによる「焦点の定まらない相互作用／焦点の定まった相互作用」の区別とは一致しない。そもそも二者の議論はそれほど異なっているわけでもない。とはいえ、関心はかなり異なる。

ゴッフマンは、ルーマンとは違って、コミュニケーション（ないし行為）に発展しないもっぱら知覚レベルで生起する「焦点の定まらない相互作用」をも社会秩序として分析を彫琢している。もっとも、焦点の定まらない相互的な知覚や行為に基づく「社会秩序」を記述しようとしたゴッフマンの議論は、M・ウェーバー以来の社会学固有の問題設定といってよい「社会的行為」についてルーマンがとりあげた議論に少なからず類比できるように思われる。

一方、ルーマンが議論の中心に据えているのは「知覚の知覚」およびコミュニケーション（行為）が相互作用システムの形成や再生産にどのように貢献しているかであり、これはもっぱら「焦点の定まった相互作用」にかかわる。このとき相互作用システムに構造を与えるのは「主題」であるとされるが、こうした力能はコミュニケーションや知覚の知覚が「主題」の受容と拒絶という選択性の強化に寄与しているからである。そして、相

相互作用システムの「同一性」とはこうしたコミュニケーションや知覚による主題の明示的な主題化の一つにとどまるものでしかない。

なお、本論文のおもだった主旨はここに記したとおりであるが、行論にあたってはルーマンの相互作用システムに対する数少なくかつ有力な批判と言ってよい佐藤俊樹の議論[2000][2008]や酒井・小宮論文[2007](小宮[2011])をも間接的にはあるが俎上にあげてみたい。なお、ルーマンの翻訳からの引用については適宜変更を加えてある。

1. 「単純なシステム」－「知覚の知覚」とコミュニケーションあるいは行為

論文「単純なシステム」において、ルーマンは基本的な相互作用システムを「単純なシステム」(einfache Sozialsysteme)として扱っているが、これは「参加者のすべてにとって、直接わかるという意味で単純なの」だと説明しており、この単純さの基準として互いに「居合わせていること」(Anwesenheit)を概念として選んでいる(Luhmann[1975]7=21頁)。そして、この「居合わせている」とは「互いが知覚可能である」ということにはほかならない。「参加者は、自分の体験や行為をその時々 of 相互作用に与え合う」(Luhmann[1975]7=22頁)。

もちろん、互いが知覚可能な状態にあり自分にとってはまぎれもないことであっても、たとえば「ガンをつけた」とか「つけない」とかといった話になれば、相手は自分の知覚したことを否定できる。そして、この相手の知覚を否定することはとても難しい。だから、ここには互いの知覚を基礎にできるどうかは確定できないというダブル・コンティンジェンシーが見いだせる。逆に、知覚可能性や「居合わせる」ことをめぐる社会的慣習はこうした特徴から生み出されてきたものであり、そこから相互作用システムを特定することはできない。

ルーマンは、ゴッフマンにしたがって、二人あるいはそれ以上の個人が互いに知覚する領域に入ると必然的にシステムが形成するとしている。と

はいえ、これは実際に関係が生じているということではなく、この関係の選択性に依存している。というのも、互いが知覚可能な領域に入っても、個人はすぐにその領域の外側にでることもできる。逆に、あえてそこにとどまり続け、互いに互いのことを知覚し、その内容を共有していけば、互いに居合わせることの選択性は増大する。もちろん、こうした相互的な知覚の充進による選択性の増大を直接確認することはできない。だが、この非任意的な状況（ダブル・コンティンジェンシー）が一種の構造として次の選択を可能にする。

相手のこと（知覚状況）が気になり話しかけるのであれば、互いを知覚する状況から互いに会話（コミュニケーション）する相互作用システムへと進化することになる。ゴッフマンも「人間は同じ場に居合わせると、おたがいになんとか話しかけるようになるが、それは焦点の定まらない相互作用から焦点の定まった相互作用に移行する際の単純な、そしてもっとも一般的な一例である」（Goffman[1963]99=89 頁）と述べており、たとえば、そのきっかけとして「目を合わせること」をあげている。逆に、相手のことに気づかないふりをする「儀礼的無関心」のような社会的慣習を採用することで、相互作用の境界を意味的に規定し、この相互知覚状況を回避することもできるが、こうした相互作用も互いに居合わせる相互知覚可能性に依存していることになる。

この無言の主題化されないまま互いを知覚するという形式でもかなりの情報交換が可能になる。たとえば、相手を意識して振る舞い方や話し方を調整することができるようになる。こうした情報交換は、自分が知覚したことがさらに知覚の対象になるという意味で再帰的であり、単純な知覚とは区別される。個人は、相手に知覚され、それをまた知覚することで自分の振る舞いを調整し、さらにそのことを知覚できる。だからこそ、人は人前にいるときといないときでしばしば自らの振る舞い方を変える。

しかも、この手の知覚過程では再帰（反省）的な統合が特に形成されやすい。というのも、誰かに知覚されただけの事柄であっても自らの行為と

して帰属されうるし、後で何を言われたかわかったものではない。「あのときあなたは――」。のみならず、そもそも知覚が一定の強度を超えれば、自分の知覚したことを居合わせた誰もが知覚できること知覚し、前提にできるからである(1)。また、ここからコミュニケーションが始まれば、われわれはわれわれが知覚したものを確かなものにしようとして言質をとろうとしていることになろう。「さっきの音が聞こえたでしょう？」。

しかしながら、話は最初にもどるが、こうした知覚は当てにはならない。しばしば、目撃証言はひっくり返り、相手が自分に気があるという期待は勘違いに終わる。知覚した事柄やその意図を改めて問題にしようとしたとき、常に期待したとおりの返事がかえってくるとはかぎらないし、それを責めてもいかんともしがたいところがある。「知覚させること、それどころか知覚メカニズムによって目標にされる気分、要求、拒否といった「伝達」でさえ、責任のあるコミュニケーションとしては扱えない」（Luhmann [1975]10=22 頁）。問題にできるとしてもせいぜいそのときの振る舞い方が関の山であろう。「あんなところでこちらを振り返れば――」。

ところで、ここまで見てきたルーマンの議論はゴッフマンの「焦点の定まらない相互作用」を下敷きにしているといってよい。ただし、ルーマンが活用していく「知覚の知覚」（体験）／発話による「コミュニケーション」（行為）という区別は、その下敷きのようにも見えるゴッフマンの「焦点の定まらない相互作用」／「焦点の定まった相互作用」の区別には必ずしも一致しない。

たしかに、先に引用したゴッフマンの記述をみれば、「焦点の定まらない相互作用」から「焦点の定まった相互作用」への移行過程は知覚過程から発話過程への変遷であるように思えるところがある。そして、ルーマンの議論も「知覚の知覚」から「主題」を伴う発話過程へと移行していく。しかし、ルーマンは、単純なシステムの特性について、「知覚による接触」と「言葉によるコミュニケーション」という二つの体験処理の過程が同時に利用されていくものを標準として考えている。そのうえで、もっぱら発

言ないし知覚のみを通じて調整される単純なシステムもサッカーなど専門家による特殊なものとしてその存在について言及している (Luhmann[1975]16=25 頁)。

ゴッフマンについてみれば、焦点の定まった相互作用の一部として、「出会い」ないし「対面的関わりとは、同じ状況に居合わせたふたり、またはそれ以上の人々がおたがい一緒になって単一の知覚的・視覚的焦点を維持しようとするすべての場合を含む。すなわち、参加者全員が単一の相互行為と感ずる行為がコミュニケーションの優先権を有する場合である」と述べたうえで (Goffman[1963]99=89 頁)、会話的やりとりを主たるものとして取り上げていくが、例示されているのは「世間話をしたり、食事をしたり、愛を交わしたり、ゲームをしたり、討論をしたり、サービスをするといった」いとなみであり (Goffman[1963]89=100 頁)、それぞれで知覚過程と会話過程のバランスは異なる。つまり、「知覚の知覚」を「焦点の定まらない相互作用」のみに重ねる理由はない。

ここではこの点を確認しておくだけにして話を先に進めると、ルーマンはこの発話過程で取り結ばれる焦点を「主題 (Thema)」(話題)と呼んでいる。たとえば、「こんにちは」のような最初のやりとり自体が「その挨拶の仕方はなんだ」といった具合に明示的に主題化できることから分かるようにすでに一つの主題をなしうる。この「主題」が相互作用システムにおいて「弱い構造」として働く。相互作用において発話は再帰的な知覚よりも高い注意力を要求し、選択性も高い。話しかけられれば答えなければならないし、参加者は言葉を「交わし合うその時々」に共通の主題に関わっていなければならない (Luhmann[1975]13=24 頁)。

このとき相互作用システムは、システムを構成しうる「多様な知覚過程に対して再び選択的に関係する」 (Luhmann[1975]13=24 頁)。われわれは相互作用の過程でさまざまな事象を知覚するが、発話過程においてはそのなかで「主題」に関わるもののみに注意をあてる。言い換えるなら、主要的に「関与」する。「主題による集中は、そのつど一つの主題だけが承認

され、維持されることで、単純化を可能にする。その意味でシステムを作る出来事の連続した秩序が生じ、多様性が順々に表現されなくてはならなくなる」（Luhmann[1975]13=24 頁）。

参加者はこの主題にあわせて意見を述べなければならないし、新しく会話の輪に加わる者は何が主題（話題）になっているかに耳を傾けながら参加しなければならない以上、主題は「システムへの採用過程をも統制している」（Luhmann[1975]14=24 頁）。このように発話内容の選択を規定するという意味において、主題は単純なシステムの構造として働いている。つまり、ルーマン式に言えば、「主題」の導入により発話過程は素朴な「知覚の知覚」にはない、時間的、事象的、社会的な意味上の制約が新たに加えられていることになる。

こうして我々は特定の主題（話題）について語り合い、さらには特定の主題そのものを明示的に主題化できるようになる。「主題は個々の意見から区別できるそれ固有の同一性を獲得する。この場合、主題は、個々の意見が、主題に合っているか反れているか、また、その主題を必要としているか、また変更するかどうかを決定できる（場合によっては、主題化できる）」（Luhmann[1975]13=24 頁）。

繰り返すが、これはきわめて「弱い構造」としてである。「主題」はそもそもそうつらい易いものであり、多くの場合、長続きせず、その都度の参加者から独立に決定されることもない。誰にでも話せることもあれば特定の誰かにしか話せないこともある。深刻な話もあれば、その場限りの話もある。そうした意味では、「主題」にもとづく発話過程も、知覚の知覚ほどではないが緩いものである。

とはいえ、この「弱さ」は、主題（話題）の変更が容易であり、その分融通が利くのでシステムの持続に貢献しうる。参加者の注意はしばしば反れるし、偶発時に居合わせて急に主題が一時的に変わることもありえる。いつまでも話が尽きないということもあれば、話を終わらせるにはある種の技法も必要になる。

他方で、相互作用システムでは、このように「構造的な弱さ」があり、参加者やその都度の主題にきわめて左右されやすいので、たとえどんなものであろうと主題とされた事柄をストレートに否定するのは難しくなる。主題についてあからさまに否定したり、疑問をなげかけたりすれば、発言者自身の人格が問われていると受け取られかねず、軽いはずの主題が深刻さを増したり、相互作用の持続を妨げることになりかねないからである。

この点をあらかじめ考慮しようとするれば、主題によるシステム制御のために、あらためて知覚が利用されなければならない。つまり、発話過程だけでなく、その都度の表情や身振りといったものを参照するようにするのである。そうすれば、たとえあからさまではなくとも否定的な態度をとることができる（あくびをする）。

こんな調子であるから、主題は常に明示的に主題化されているとはかぎらない。「たしかに、本来の主題が公の主題にされない場合がありうるが、それにもかかわらず、参加者が主題の状態を知り、受け入れ、言い換えでやりくりするシステムは潜在的に制御されているのである」（Luhmann [1975]15=25 頁）。同じ話をしているつもりが違った話をしているといったことは容易に起こりうるし、意図的であれ無意識であれ、同じ主題について話しているつもりがだんだんと話がずれていくというようなことも起きるだろう。しかし、それが明らかになるためにはあらためて会話の主題（話題）が明示的に主題化（話題に）されなければならない。

というわけで、特定の主題（話題）について会話の進行に滞りが生じたなら、主題（話題）そのものを明示的に主題化（話題に）し、あらためて主題としてそれを構造化できる(2)。もちろん、このとき会話は「主題」（話題）を「主題」（話題）にしたやりとりとして、別の主題（話題）へと移行し、それにより会話的なやりとりを持続させる。誰かが暴言を吐けば、その暴言を吐いたということ自体が問題になる（「オマエを採ったのは間違だった」）。このように、主題（話題）はそれ自体が必ずしも明確ではなく流動的であったとしても、相互作用システムを構造化し、その持続に

貢献することができる。いずれにせよ、それが何であれ、われわれは何かについて話しているのである。

個人が集まって、共通の主題のもとでやりとりが進行すると当の相互作用システムに固有の歴史が生まれることになる。この歴史は共同で回想する対象になる一方、それ自体がさらなるシステム生成の構造となる。たとえば、以前のできで受けた仕打ちをあらためて問題にすることもできるだろうし、連れ去られたユダヤ人を前に何もできなかった自分たちを振り返ることもできるだろう。相互作用システムの歴史からなにをとりだすかは、それ自体選択的であり、その一部はシステムの「記憶」としてさらなる秩序を生む構造（「主題」）となりうる。「昨日の話の続きだけどさ」。

もちろん、システムの歴史自体が問題になりえ、それを確認する手段が参加者の発話過程に頼らざるをえない以上、しばしば言った言わない問題が生じうる。たとえば、イジメやいやがらせ、破綻しかけた恋愛関係など。逆に、たとえ次の機会に「新たな」相互作用システムが生成しても、そこで相変わらず同じことでくだをまき、後から蒸し返すこともできるし、全く関係のない話もできる。こうして主題（話題）の妥当性をあととまで尾を引きずることができる以上、そうした意味で相互作用システムの歴史はいつまでたっても歴史化しないかもしれない。

以上のような次第で、相互作用システムは二つのタイプの「環境」にとりまかれていることになる。一つは、現在の知覚領域である。その時点で知覚可能なすべての事象がシステムを構成するために参照されるとかぎらない。のみならず、その時点で（十分に）問題にされなかった知覚事象を後々問題にすることができる一方、やはりそのすべてが問題にされるとはかぎらない。だが、そうした事象はあとからでもいつでも問題にされうる。そして、主題はこうした環境からの干渉にたいして、時間的かつ事象的に、そこそこ選択的に対応するための力量を備えているのである。

繰り返せば、相互作用システムの構造化ならびにそれに応じた選択を規定する主題は参加者の知覚過程に左右されやすい。と、同時に互いに「居

合わせる」ことがシステムの構成要件になっているので、これを単純に黙殺することもできない。つまり、あからさまな否定が難しい。だから、知覚が参照される。「一定の範囲で、主題の制御のために、またそれぞれどこか主題によるシステムの制御のために、知覚作用が再び利用されなくてはならなくなる。――。こうした事態から発話過程は、知覚過程からの不完全な分化として把握される」(Luhmann[1975]15=25 頁)。

そこで、こうした不確定性をどこまで許容するかについては、組織化された社会システム同様、参加者の加入／離脱と参加者の取り扱いに頼ることができるし、相互作用上の規範ないしは道徳を参照することもできる。参加者の取り扱いについては、自ら誤りをみとめることもあれば、軽くたしなめたり、見ないフリをして、問題になりかねない主題を穏和に主題化して、相互作用システムを持続させようとするのが大概である。

もし、あからさまに問題状況を主題化すれば、それ自体、気まずい状況を生み相互作用システムの持続に危険をもたらしかねない。つまり、主題が主題として働かなくなるし、場合によっては、問題状況を生み出した当の人物を道徳的に評価する必要に迫られるかもしれない。だが、あからさまな道徳化が問題に決着をつける機能を果たすとはかぎらないし、喧嘩別れに終わる可能性もある。むしろ、道徳は参加者の受け入れにかかわり、相互行為システムの障害を取り除く作法のような流儀で効果的に機能する。

また、参加者の加入と離脱については、多くの場合、「単純なシステムの非常に単純な採用過程は「知り合いであること」にある (Luhmann[1975] 36=35 頁)。他方で、相手によって話を選ぶということがありうる。つまり、誰かをやりとりの参加者に加えたり、加えなかったりすることで主題(話題)を調整し、相互作用システムが円滑に持続できるようにする。あるいは、参加者をまともに参加者扱いしないということもあるかもしれない。鬼ごっこで年下の子を加えたときにこの子を「おまめ」扱いする。もっとも、こうした配慮はあくまでも参加者の取り扱いの問題であり、相互作

用システムの継続にそのままかわるわけではない。

さらに、相互作用システムの参加者の選別過程がとりわけ問題になるのは、相互作用システムを断続的かつ長期的に持続させるような関心が働いてくるときである。ルーマンはこのとき、ジンメルの二者関係と三者関係を例にあげている。すなわち、二者関係は二人の関係がおわるとき当の関係そのものも終わってしまうが、三者以上の関係においては、たとえ、一人が抜けたとしても関係は継続するし、あらたな参加者をリクルートしてくこともできる。だから、ジンメルは三者関係を本来的な社会であると呼んだ。ルーマンはここにシステムの抽象化された同一性を認めることができるという。

たしかに相互作用を中断すれば、その続きを考えることができるようになる。ルーマンは「システムは、連続性を中断することで連続性を得るという逆説」と述べているが（Luhmann[1975]32=31 頁）、これは中断しなければ再開するということが意味を持たず、中断を経ずには以前以後の連続性を確認することができないといった程度の話である。それに、このときルーマンが挙げているのは、会うことの意味の反省、時間、場所、参加者の取り決めなど、相互作用システムの主題として取り扱われるような事柄ばかりである。

もっとも、恒常的に相互作用を継続する間柄では、ゆるいながらも成員意識が成立し、ある種の仲間集団のようなものが成立していると考えられる。もちろん、このメンバーシップは少なからず流動的である。だが、このような認識が暗黙にも成立していればいるほど、相互作用システムは中断し、あらためて継続するゆるやかな同一性をそなえたシステムになりやすい（「潜在的パターンの維持」）。つまり断続するシステムは「われわれ意識」を発達させ、「仲間」としての行動規則を作り上げ、誰が「仲間」になりうるか採用過程を制御できるようになる。

こうして「相互作用システム」は「組織」的な色彩を帯びてくる。とはいえ、これだけでは単純なシステムは行為することができないし、さらに

組織として動き始めるには「成員」(メンバーシップ)が必要である。そうすれば、単に「居合わせる」ことで互いに期待されることが決まってくる程度の制約をこえて、相互作用から独立してそれぞれの成員に期待されることや決定権が定められたコミュニケーションの可能性が開かれてくる。

こうしてみれば、「単純なシステム」の段階におけるルーマンの議論の骨子は、「居合わせる」ことがもたらす多様な知覚可能性(「再帰的な知覚」ないし「知覚の知覚」と、そこから選択的に相互作用システムを持続させる「主題」という二つのステップ、そして、この「主題」を選択し、維持していく「知覚(の知覚)」とコミュニケーション(行為)という二つの概念の組合せからできあがっていることがわかる。

これを、互いの知覚過程と主題をとりまく発話過程(コミュニケーション)という二つの問題系へと翻訳して、この二つを「焦点の定まらない相互作用」と「焦点の定まった相互作用」に素朴にわりふることが正しくないことは簡単に確認しておいた。ゴッフマン自身も「焦点の定まらない相互作用」と「焦点の定まった相互作用」のいずれも身体的には同様の記号が用いられることを確認しており、行論上ではルーマンの議論とゴッフマンの議論はさして違ったものになっているわけではない。この点のさらなる検討は後回しとして、次に『社会システム理論』の段階におけるルーマンの相互作用システムの取り扱いについてみてみることにしよう。

2. 相互作用システム(社会システム論)―全体社会と相互作用との差異

さて、次にルーマンが体系的な著作を公表して行くにあたり、この「相互作用システム」をめぐる議論がどのように引き継がれていったのか(あるいは、いないのか)を見ていくことにしよう。ルーマンは、『社会システム論』では主として第10章「社会と相互作用」で相互作用システムについてとりあげているが、この章での議論は「単純なシステム」の議論を

引き継ぐ一方、新たに「社会システムと相互システムの差異」について議論を展開している。内容上、前節との重複部分も出てくるが議論の連続性を確認しておくためにその部分も含めてひととおり概観しておくことにしたい。

相互作用システムは全体社会との時間的な関連においては「エピソード」として扱われる。つまり相互作用はそれ以前のコミュニケーションの成果に依存し、それ以後もコミュニケーションが継続するからこそ、相互作用システムを実現できる。たしかに、相互作用はそれ以前に行われたコミュニケーションの内容を「主題」とすることができ、そこでの出来事はしばしばその後のコミュニケーションで参照される。サザンオールスターズの紅白歌合戦（2014年）のパフォーマンスは、無数の相互作用システムで「主題化」されることにより、さらなる多様なコミュニケーションの可能性をもたらす。だから、ルーマンは、全体社会は相互作用システムとの差異をつうじて複雑性を獲得するのだと言う。

この相互作用システムの境界は「居合わせている」ということに依存しており（Luhmann[1984]560=750頁）、必要であれば、「参加者が誰か」を参加者で決定できる（たとえば、列を作るとき）。あるいは、誰かをいないことにもできる（たとえば、会食中の客にとっての店員）。そして、この意味境界の設定で大きな働きをするのが知覚過程である。「知覚の知覚」という再帰的な知覚はダブル・コンティンジェンシーにかかわる。そして、自分が知覚していることを誰かが知覚している（かもしれない）ということは観察可能なコミュニケーションに接続することができるし（「いまの見ましたよね」）、「知覚の知覚」を拠りどころにもしている。目の前で何かが起きれば、それを知覚したか知覚していないかのいずれかであり、たいていの場合は知覚しているものである。

いずれにせよ、「知覚の知覚」を否定することは難しく、しかも「知覚の知覚」については説明する必要もない。気づかなかったと言われたら、どうやってそれを翻すことができるだろう。しかも、この「知覚の知覚」

は、行為として観察されるコミュニケーションによくもわるくも影響を与える（「誠実さが感じられない！」）し、攪乱要因にもなる（あっ、鼻血）。のみならず、こうした再帰的な知覚をとおしてコミュニケーションする動機付けも生じる。知覚にもとづくかぎり自らの行動が一方的に相手から解釈されかねない。放っておいたらあとで何を言われるかわかったものではない（「泣いている子どもをほったらかしにしておいたじゃないですか！」「えっ???」）。

こうして純然たる知覚を離れてコミュニケーションを展開する必要にせまられたとき、事象にかんする「主題」（話題）が構造化される。このとき素朴な知覚とは異なり「そこに居合わせている人々がみな同時に話すということは、禁じられており、原則として一度に一人だけが話すことを許されている」（Luhmann[1984]564=756 頁）。そして、このような構造が形成されると相互作用システムのコミュニケーションは話し手を基軸に一つの焦点、すなわち「主題」（話題）にあわせて整えられることになる（3）。

こうして会話の順番が制御されると、次の潜在的な話し手が想定できるようになり可能性の余剰が生じる。誰にでも発言する権利が与えられている一方、当の「主題」（話題）について何か言いたくても発言の機会が与えられない人や他の「主題」（話題）に言及したい人はいるものである。そして、これは次回の相互作用システム形成する動機付けともなりうる。そうした意味では話の続きをとということで当の相互作用を中断し、再開を約することもできるが、これはあくまでも主題レベルで扱われることであり、相互作用システムにはその実現を保証する手段は備わっていないし、間が開いてしまえば、相互作用システムへの参加の動機付けを再活性化するのも難しくなる（「まだ、そんなこと言ってるのかよ」）。

一方、主題が形成されても「居合わせる」状況で相手の言ったことをあからさまに否定するのは難しい、そうした場合「知覚の知覚」がその補助手段になる（本当はやりたくないんだな）。また、だからこそ、みずからもそれに見合った感受性を示せるよう身体に関する規律も強まる。いわば

観察可能なコミュニケーションの様態を再帰的な知覚を介した「間接的な」コミュニケーションが制御することになるわけである（4）。相互作用システムは大抵このような知覚とコミュニケーションという二つの過程を並行させて成立しており、再帰的な知覚はシステムの「内部環境」としてコミュニケーションの営みに修正をはかる。「相互作用システムにおける知覚とコミュニケーションの二重の過程は、攪乱されやすく一定のことがらに対して選択的に敏感であるにもかかわらず、ほとんど常に成立している」（Luhmann[1984]562=754 頁）。

というわけで、全体社会と相互作用は異なるシステムである（Luhmann[1984]568=761 頁）。相互作用システムは知覚とコミュニケーションに依存しながらも、それが全体社会にエピソードを提供するという意味において相互作用システムを超えた全体社会が成立するための条件となる一方、相互作用システムが提供するエピソードが当の相互作用システムの境界や空間を越えてで拡がりうる以上、相互作用システムは全体社会を想定しないかぎり成り立たない（ちなみに、古代社会では社会のリアリティが相互作用によって全面的に方向付けられていたと考えられる）。

だが、こうして相互作用システムの参加者は全体社会システムをつうじて自由と制約の整序ができるようになる。相互作用システムの参加者は、当座の相互作用システムで果たしている役割だけにつける存在ではないし、お互いがそのことを知っていなければならない（ダブル・コンティンジェンシー）。仕事と結婚生活は別の問題である（「それを言っちゃあおしまいよ」）。この相互作用システムの外側からの制約をどのように扱うか当の相互作用システムの内側で見通しがつけられるようになると（システムと環境の差異の再導入）、相互作用システムの参加者は互いに自らを制御し、当座の相互作用システムにかかわらない責務に対する配慮を他の参加者に求めることができる。こうした配慮がなされることにより相互作用システムの参加者は一定の制約から距離をおいて自由にふるまうことができる。「今日は無礼講ということだ」。

さらに、相互作用システムでなんらかの「主題」が選出されるにあたっては、環境に当たる先行する全体社会のコミュニケーションや相互作用システムの参加者の立場が考慮される。「バリの新聞社が襲撃され12人が死亡した」という記事を話題にできる一方、集まりのなかにその関係者がいるとなればこの話題の扱いにはより注意を払うようになるだろう。ルーマンはこうした全体社会（当の相互作用システムの外側）をつうじて明確になる諸事情（コンティンジェンシー）によって相互作用システムが制御可能になるという。諸事情（コンティンジェンシー）が明確にされることにより全体社会と相互作用の差異が絶え間なく再生産されており、こうした諸事情（コンティンジェンシー）が明確にされていなければ、相互作用はすみやかな行為の継続ができなくなるか、単純な事象しかとりあげることができなくなる。実際、相手が誰かも知らず、世間で起きていることがまるで分からないとすれば、さして話すこともなくなってしまうにちがいない。

こうして相互作用システムが参照する全体社会との差異は、全体社会が獲得する抽象化能力に伴うものである。たとえば、先述の諸事情（コンティンジェンシー）は特定の相互行為を越えて当てはまり、特定の相互作用でそれを左右することはできない。相互作用システムではあからさまな否定はしばしばコンフリクトを引き起こすが（だから、補完手段として「知覚の知覚」が援用される）、全体社会だけは否定を活用することができる。この二つのシステムの分化が大きくなると交換やコンフリクトといった参加者以外への影響を度外視したその場かぎりの相互作用形式の有効性も確認できるようになる。

しかも、全体社会は分化しており、サブ・システムごとに個人には異なる役割等が割り振られ、期待の連関が同定できるようになるし、この期待（構造）の連関を更新することもできる。これらは個別の相互作用に依存する必要がない。しかも、個々の相互作用システムのすべてが一つの部分システムに分類されるとはかぎらない。だから、全体社会はおおむね相互

作用から成り立っているにしても、相互作用から全体社会にいたることはできない（Luhmann[1984]585=785 頁）。

こうして、ルーマンは、全体社会と相互作用の差異は全体社会と相互作用の双方にとって選択の可能性が開かれる、という最初の話を確認して、この差異が社会－文化的な進化の前提条件であることを確認する。以上、『社会システム論』でのルーマンの相互作用システムについての議論は、「全体社会と相互作用の差異」という区別が導入され、ゴッフマンが区別する相互行為とその外側の「より広い社会」の違いに相当する区別が社会分化としてより体系的に論じられるようになっているが、知覚とコミュニケーションの区別の扱いについては大きな違いは見られない。

3. 相互作用システム（社会の社会）－「居合わせている／不在である」

最後に、『社会の社会』の段階におけるルーマンの相互作用システムの扱いを確認しておこう。『社会の社会』では議論の抽象度がより高くなりゴッフマンとの関連もそれだけ見えにくくなっているが論旨の基本は同じである。『社会の社会』では「居合わせている／不在である」という区別が相互作用システムの構成原理となっているが、これは互いに「居合わせること」をシステムの成立条件とすることを引き継いでおり、そのもとで知覚とコミュニケーションの双方が働くし、相互作用システムが提供する過剰な可能性からなされる選択のうちに「主題」による構造化も含まれることを排除する理由はなからう。

互いに「居合わせる状況」（対面状況）は知覚可能性を伴う（コミュニケーションと意識過程の構造的カップリング）。ここで重要となるのは、自分が知覚できることを居合わせた誰かが知覚できるかもしれないと仮定できることである。誰が聞いているかわからないから、職場の近くの居酒屋では仕事の話はできない。もっとも自分の話が隣の客に聞かれているかもしれないと思うなら確認してみればよい。居合わせる状況がもたらずダ

ブル・コンテインジェンシーの問題はコミュニケーションをつうじて解決される。

こうしてはじまる相互作用システムの自己規制のうちには、居合わせている者が互いに配慮し、各人がその場にかぎらない役割を抱えていることにたいする期待が含まれてくる。つまり、「居合わせている／不在である」という区別の適用にもとづいて相互作用システム(とその環境という差異)が形成する。一方、「居合わせている者はそこから逃れられない」(Luhmann [1997]815=1109 頁)。居合わせている者は「聞き手」として扱われ、何らかの理解がある者として積極的な参与者になりうる。

ところで、互いに「居合わせる」相互作用では逸脱的な発話がなされたときそれを否定するのは難しい。というのも相互作用システムではコミュニケーションは特定の誰かの行為に帰属される(「あそこで、オマエがあることを言わなければ――」)。だから、それを考慮した振る舞いの必要が生じる。これに伴いコンフリクトが生じる可能性もあるが、やはり、それに対応するコミュニケーションが構造化されていくものである(Luhmann [1997] 478 = 543 頁)。「まあ、まあ、そんなことは言わずに――」。いずれにせよ、いま話している者がいるかぎり、相互作用システムは常に過剰な可能性を生み出す。つまり、話者交替等による選択可能性が生じる。さらに、相互作用システムはその「始まり」と「終わり」も実際の営み(作動)に依存しており、システムそのものはこの点について何も保証しない。

さて、このような相互作用システムはその前後の事象をつまりは全体社会を前提にしなければ生じ得ないし、互いに居合わせる状況がまったく存在しないまますべてのコミュニケーションが進行するということもありえない。つまり、全体社会と相互行為は互いに互いを前提にしており、二つの差異は根源的な構造である。このとき、全体社会は、当の相互作用のそれ以前とそれ以後として現われてくると同時に、顕在化している相互作用システムの環境としても現われてくる。つまり、「全体社会は相互作用へ

と二重に介入する」（Luhmann[1997]817=1112 頁）。

全体社会と相互作用の差異によって、「居合わせている／不在である」という差異を互いに居合わせている参与者同士のあいだに「再参入」することができる。つまり、「居合わせている者」や「不在の者」について語ることができる（事象次元）。そして、こうしたその都度の相互作用は「始まり」と「終わり」のある一つのエピソードとして、エピソード化されない全体社会を前提にしており、この全体社会は顕在化している相互作用の以前／以後、ならびに環境として働く（時間次元）。また、以上から、居合わせている者が他の相互作用システムで期待されている事柄を考慮し、この制約のもと参与者が個人として自由にふるまうことができるようになる（社会次元）。

こうした相互作用システムは、かつて全体社会を（とりわけ口頭のコミュニケーションに依存していた）把握していた時代とは異なり、「全体社会内環境に対して無関心になる」（Luhmann[1997]825=1119 頁）。お互い当座の相互作用をこえて、当の相互作用がそれ以外のどんな相互作用にかかわっているか知らないこともしばしばなのである。このように、『社会の社会』では、互いに「居合わせること」に対応するかたちで「居合わせている／不在である」という区別が導入されている。一方で、全体社会と相互作用の差異にかかわる記述が全体のかなりを占めるようになってはいえ、最初に述べておいたように、ここにこれまでの議論との連続性を読み取ることは十分可能である。

4. コミュニケーションと知覚の知覚で強化される主題の選択性（受容／拒絶）

さて、ここまでルーマンが相互作用システムを主題として語った三つの論文および書物を概観してきた。次は、この議論とゴッフマンの議論の異同を検討し、ゴッフマンには見いだせないルーマンの議論から引き出せる含意が何かを明らかにする段である。ルーマンが自らの相互作用システム

論を展開するにあたって、なによりもゴッフマンの相互行為論から参照にしたのは「焦点の定まった相互作用」と「焦点の定まらない相互作用」の区別とそこから派生する諸問題についてである。

実際、ルーマンは相互作用システムの構造にあたる「主題」について論じるときに「単純なシステム」の注 11 ならびに『社会システム論』の第 10 章注 19 でゴッフマンの『集まりの構造』ほかを参照しており、それを「焦点の定まった相互作用」に重ねている。そして、「主題」の例として本文でとりあげられているのはすでに見てきたように会話である。

だから、一見するとルーマンが「主題」として焦点化しているのはもっぱら会話であるかのように思える。しかし、この理解は必ずしも正しくないこともすでに行論中で確認しておいた。ルーマンは、相互作用システムを「知覚の知覚」と「発言」（コミュニケーション）による「主題」展開の二元的な過程として描き出しているのみならず、もっぱらそのどちらかだけに依拠して相互作用システムが展開することも否定していない。

「単純なシステム」では次のような指摘が見いだせる。「たしかにほとんど発言だけ（例えば学問上の議論）をつうじてだけ調整されるか、あるいはほとんど知覚（例えばサッカー）をつうじてだけ調整されるというふうな事例はある」（Luhmann[1975]25=16 頁）。あるいは、『社会システム理論』第 10 章では、バスを待つために列を作るといった例が相互作用システムの一例としてあげられている。つまり、もっぱら「知覚の知覚」のみに依存した相互作用システムの形成もふつうに生じている。

ゴッフマン自身「焦点の定まった相互作用」の典型的な事例として会話から論を始めているように、ルーマンも会話を典型的な事例として扱っているだけで、主題として会話の焦点ばかりがとりあげられていると解すべき理由はない。「知覚の知覚」も相互作用システムの再生産に貢献する。

そもそもゴッフマン自身も「焦点の定まった相互作用」と「焦点の定まらない相互作用」の違いを、言語を介したコミュニケーションと知覚（の知覚）との違いからはみていない。でなければ、「儀礼的無関心」を「焦

点の定まった相互作用」として扱えるわけがない。また、会話（「出会い」）の始まりはたいてい「目を合わせる」相互的な知覚過程であり、他に「焦点の定まった相互作用」の事例として挙げられているものはすでに指摘しておいたように知覚の知覚と発話過程のどちらに比重をかけたかものになるかは一概には言えない。ルーマンにとっても、ゴッフマンにとっても、発話過程と知覚過程はいずれも「焦点の定まった相互作用」の構成要素であり、「相互作用システム」の構成要素なのである。だから、「知覚の知覚」と「主題」を「焦点の定まらない相互作用」と「焦点の定まった相互作用」にふりわけることはいできない。

では、ルーマンは「焦点の定まらない相互作用」と「焦点の定まった相互作用」をどのように論じ分けているのか。たとえば、「無言で、主題化されていない相互知覚」の例として同じ居場所にて「ドカン！」と大きな音がしたを挙げているが（Luhmann[1975]23=11 頁）、これは「焦点の定まらない相互作用」に相当する。そして、厳密に言うならば、ここでは互いが知覚していることを知覚しているわけではなく、相手が自分と同じことを知覚していると知覚している以上、一方的な「再帰的な知覚」である。他方、相手が自分を知覚していることを知覚しているおり、そのことを相手も知覚しているといった相互性が伴うとなれば単なる「再帰的な知覚」とどまらないまさに「相互的な知覚」が生じており、この上位概念として「知覚の知覚」という概念を採用した方が概念的にはすっきりするであろう。いずれにせよ、この相互的な知覚状況が、ちらりと見る程度ではなく、お互いを見つめあうようなかたちで持続的な焦点を持つようになれば、それだけで「焦点の定まった相互作用」になる。つまり、この「相互的な知覚」にもっぱら依拠することでも「焦点の定まった相互作用」ならびに「相互作用システム」を形成する。

『社会システム論』では「相互的な知覚」がコミュニケーションになることを次のように指摘している。「自分が相手によって知覚されているということを他我が知覚しており、さらに知覚されているということをみず

から知覚していることもまた相手によって知覚されているということを他我が知覚しているのなら」、他我が行動は「コミュニケーションの一貫として相手に理解されるということである」(Luhmann[1984]561-2=752-3頁)とし「相互作用システムのなかではコミュニケーションしないていることはできない」。また、繰り返しになるが、ルーマンは「相互作用システムは、再帰的な自己調整にもかかわらず知覚の水準では依然としてきわめて攪乱されやすい」とも述べ、事象に関する「主題」により構造化する必要があるとして、会話の順番取りシステムに言及している。

ルーマンは「主題」に言及するにあたって『社会システム論』第11章の注19で、「こうした「焦点の定まった集まり」というものを、相互作用システムのいくつかの種類のなかのある特殊な類型とみなすのではなく、むしろ、システム形成の力能が上がるための一つの必要条件であると考える」と述べている(Luhmann[1984]564=908頁)。主題は「主題」と「主題にならないもの」を区別する。たとえば、サッカーや野球をするうえでその都度注意の焦点になる事柄は変わっていくであろうし、ミスがあればきちんと焦点を定められていたのか主題化されることにもなる。もちろん、すでに指摘しておいたように、このとき「主題」は「主題」として必ずしも明示的に「主題化」されている必要はない。

さて、では、相互作用システムにおいては、他の社会システムとは異なり、コミュニケーションの他に「知覚の知覚」が参照されたり、もっぱら「知覚の知覚」を利用して相互作用システムの形成が可能になるのはどうしてだろうか？これは互いに「居合わせる」状況に由来するコミュニケーションならびに「知覚の知覚」が有する選択性からくるものだと言ってよい。コミュニケーションにあっては「受け手」は「受容／拒否」の選択可能性が与えられる。たとえば、誰かに依頼されたらその依頼を受けることもできれば断ることもできる。一方、互いに「居合わせる」状況では相手の意向をあからさまに否定することは難しい。というのも、単純に相手の行為が否定されたというだけでなく、その人格もが否定されたように受け

取られかねないからであることはすでにみた。このとき、「知覚の知覚」は言葉のうえでの相手の意向と実際の相手の意向の差異を特定するための手段に利用できる。つまり、「知覚の知覚」がコミュニケーションの選択性を強化するのである。そして、ここで選択の対象になっているのが「主題」である。

さらに、もっぱら「知覚の知覚」に依拠した相互作用システムの展開が可能になるのも、相手の知覚を否定するという選択性が可能になるからである。たとえば、サッカーでボールを確保しているプレイヤーが、パスを待ち受けている味方のプレイヤーがいることを知覚したとしよう。ここには「知覚の知覚」が生じているが、ボールを確保したプレイヤーはパスを待ち受けているプレイヤーにあわせてパスを送ることもできるし、それを無視して自らがボールを支配することもできる。つまり、相手の知覚状況を知覚することで、次の自らのプレイに「主題」上の選択の可能性が与えられるのである。

そして、このようなやりとりが可能になる局面においては、「知覚の知覚」にもとづいたやりとりでも事実上「受容／拒否」の可能性が与えられていることになり、コミュニケーションと機能的に等価になっている。だから、ここでは「知覚の知覚」とコミュニケーションを異なる秩序に振り分ける必要はない。前述の引用にある「力能」とは「主題」の選択性（受容／拒否）を指していると考えべきである（6）。

もちろん、こうした主題の選択可能性は相互作用システムの持続能力にもかかわりうるだろう。しかし、すでに確認したように、これは二つをわけるとメルクマールにはなりえない。この注 19 は次のように続く。「なにかに焦点が定まっていなのであれば、システム形成は、すなわち、なんらかの構造が選択されないのであれば、システム形成は、非常に萌芽的にしか、つまりほんのつかの間の間しかありえない。そうしたシステム形成は、あたかも、厄介だがほん短い間甘受せざるをえないもののようである」（Luhmann[1984]564=908 頁）。ゴッフマンも「焦点の定まらない相互作用」

と「焦点の定まった相互作用」を対比するにあたって、「相手をちらりと見る」ような場合と「話を交互にしながら注意を単一の焦点に維持しようとはっきり協力し合う場合」という例をひきあいに行っている (Goffman [1963]24=27 頁)。

ここで「構造が選択されない」ということは、知覚の知覚であれコミュニケーションであれ、主題の「受容／拒絶」の可能性に開かれたやりとりが始まらないということである。とはいえ、そもそも「焦点の定まらない相互作用」をなしているのは互いに「居合わせている」状況で他人を意識してなされる振る舞い等々である。そうした意味では社会秩序が成立しているし、「焦点の定まった相互作用」にも「焦点の定まらない相互作用」にも規律化した身体に基づく同様の記号が用いられる。しかも、すべての「知覚の知覚」は後続する相互作用システムの形成に寄与する可能性を有している。ゴッフマンも互いに「居合わせる」状況ではどんな対面的相互作用にも対応できる能力をもつものと期待されると述べている (Goffman[1963] 25=28 頁)。というのも、知覚内容についての受容／拒絶が常に問題になりうるからである。そして、これは誰が居合わせていて、誰が居合わせていないのかという区別にもつながりうる。

では、相互作用システムの形成に寄与する「焦点の定まらない相互作用」は相互作用システムの一部を形成すると考えてよいのだろうか？ 確認しておけば、ルーマンは「知覚の知覚」がダブル・コンティンジェンシーをなし、相互作用システム、ないしは（観察可能な）コミュニケーションが進行するきっかけになりうると考えていた。のみならず、こうした知覚の知覚が相互作用システムの「主題」を提供することもある。しかし、知覚の知覚が「主題」をそなえた相互作用システムにつながらない場合もある。多分、この疑問は開かれたままにしてよいのだと思う。どこからが相互作用の「始まり」かを確認する必要があるなら、参加者がそれを主題化して決めればよいことなのだから。「というのはこのシステムにとって始まりと終わりは、自身の作動の中で構成される意味契機であり続けるからであ

る」（Luhmann[1997]816=1110 頁）。

ちなみに、ゴッフマンの取り上げる「焦点の定まらない相互作用」にはルーマンのいう「社会的行為」に類比できるところがある。なお、ゴッフマンは「焦点の定まらない相互作用」もコミュニケーション扱いしている。ルーマンはシステムの再生産に寄与しない社会的行為について次のように述べている。「他の人々はその行為をどうみなすであろうかという点に注意が払われる場合にはいつでも、その行為は社会的行為なのである。他方、行為が社会的再生産にかかわる行為であるのは、その行為がコミュニケーションとして意図されたり経験されたりする場合である」。「結局のところ、人々はそこに居合わせない状況で行為して、各自に（あるいは場合によってはそこに居合わせている観察者に）社会を参照するように注意を喚起することになる意味をみずからの行為に付与できる」（Luhmann[1984]580=778 頁）。同じことが「焦点の定まらない相互作用」にもあてはまるだろう。繰り返すが、ゴッフマンのいう「焦点の定まらない相互作用」は知覚のみにかぎらない。「身体的外観や個人的行為は一定の意味をもっている」（Goffman[1963]33=37 頁）。つまり、それらも社会的行為なのである。

5. 相互作用システムの「同一性」なんてどこまで確認する必要があるのか？

さて、前節の最後で述べたように相互作用システムの「始まり」や「終わり」について明示的に主題化しようとすれば、参与者は暗黙のうちにも相互作用システムの同一性を確認していることになるだろう。最後に、このシステムの「同一性」にかかわる問題について簡単に整理しておくことにしたい。ちなみに、相互作用システムの「同一性」については、『社会システム理論』の第11章「自己準拠と合理性」の「反省」（再帰）の部分で扱われている。ここでもルーマンは、「主題」と同様に、相互作用システムについてもその「同一性」をいちいち確認する必要があることを指摘

している。「相互作用システムは、通常のばあい、その相互作用システムの統一体の反省(再帰)なしに、スムーズに作動している」(Luhmann[1984] 617=831 頁) (7)。

そして、相互作用システムがその「同一性」を確認(反省)する必要があるのは、相互作用システムが中断・再開したり、相互作用システムが行為したりする場合であるとされる。しかし、これらはいずれも「反省」(再帰)のレベルの話であり、「主題」を構造とする相互作用システムそれ自体によっては寄与することができないものであることが分かる。ルーマンは「聖書サークル」例をあげて、次のように述べている。ここから相互作用システムの中断・再開をはさんだ「同一性」を問題にしたところで、それが相互作用システムそれ自体によっては保証できないことが確認されている。

「たとえば、聖書サークルの人々は、毎週決まった時間に決まった場所で落ちあう。しかしながら、このばあい、中断と再開とをあらかじめ計画に組み込むということは、その点についての取り決めをすでに前提にしており、そうした取り決めは、相互作用システムが自由に用いることのできる手段によってはもはや保証されない。そのうえ、中断と再開を計画に組み込むということは、関与者たちの動機付けをすでに前提にしているのだが、相互作用それ自体のなかで長期間にわたって相互作用への参加の動機づけを再活性化することは、周知の通り困難である」(Luhmann[1984]566=758 頁)。

というわけで、相互作用システムの中断ならびに再開のために相互作用システムが自らの「同一性」を確認するとは、相互作用システムの「同一性」を明示的に主題化するレベルの話を越えるものではない。たとえば、いくら「同一」の相互作用でも「聖書サークル」から欠席者や脱落者が出て来るかもしれないし、それを食いとめようにも当の相互作用システムでは不在の者を引き留めることはできない。また、明示化されるのが主題レベルである以上、中断や再開を確認すれば、それにあわせて別れや再開の

挨拶がなされるであろう。中断や再開はそうした話の一コマでしかない。

しかも、こうした相互作用システムの「連続性」や「同一性」は互いに「居合わせている」こととは独立に確認できる。サークル仲間間で間接的に連絡をとりあい、次回の日取りを決めて告知を流すこともできる。同様に、相互作用システムを再開し、前回の相互作用システムを同定し、連続性を確認したところで、それはこの後続する相互作用システムの主題のたかだか一つにしかならないのである。

のみならず、聖書サークルで「では、前回の続きをはじめましょう」と言って集まりを再開し、「前回ではこういう話が出ました」とやりとりが続けば、二つの相互作用システムは同一性と同時に中断を、つまり断続性をふまえていることになる。このとき中断する前の相互作用システムは再開した相互作用システムの環境に位置し、システム／環境の差異を参照して相互作用システムの「同一性」が確認されているのである（8）。二つの相互作用システムをつなぐのは、こうした主題化をおいてほかにない。

もちろん、このような中断・再開できる相互作用システムは、「聖書サークル」にせよ「顔見知り」であるにせよある程度のメンバーシップが固定しているといった具合に組織的な特徴を認めることができるであろう。だが、中断や再開のために「主題」以上に相互作用システムを構造化しているわけではないし、することはできないし、その必要もないのである（9）。

また、相互作用システムが行為するためには、さらに成員各自に期待される事柄や、とりわけ誰が判断や決定を下すのかといったことがあらかじめ定められている必要がある。たとえば、「聖書サークル」でなんらかのイベントを企画する場合やサッカーの試合をする場合など、あらかじめ各自の役割を分担しておくといったことがあるだろう。そして、この分担は分担を決めた相互作用システムを越えて妥当するものでなければならぬまいし、それは相互作用をつうじて決められる必要性もない。しかも、それでも怠ける者はでてくる。つまり、相互作用する一つのチームを確認し、なんらかの活動にいそしむことがあるにしても、相互作用システムではそ

れを明示的に「主題」化する以上のことはできない。もし、この点でより確実な連携をもたらしたいのであれば、相互作用システムはそれだけ組織的な要素を帯びてくることになる。

だから、相互作用システムの「同一性」を考えるうえでも、相互作用システムはその構造である「主題」以上のものを調達することができない。「反省」（再帰）とは、あくまでも主題を取り扱うレベルの話であって、相互作用システムの再開や行為、それ自体に直接貢献することはない。ただ、ふだんは明示的に主題化されていない「主題」を明示化しているだけのことなのである。そして、こうした明示化は、知覚の知覚とコミュニケーションにより「主題」を明示化し、参加者に受容と拒絶の可能性を提供するという点では、これまで確認してきたことと違わない。自らの「聖書サークル」について反省（再帰）をはじめることによって「聖書サークル」が分裂することもある。相互作用システムはどこまでも、互いに「居合わせ」状況で、知覚の知覚ならびにコミュニケーションが提供する主題の選択性により構造化されるところにその種別性が見いだされるのである。

注

- (1) たとえば、シュッツが同時性として取り上げた事態とはこのようなものに他なるまい。
- (2) ルーマンは必ずしも明示化される必要のない「主題」が明示的に主題化されることに関連して、ガーフィンケル&サックスの「定式化」論文を参照している (Garfinkel & Sacks[1970])。
- (3) これは会話の順番取りシステムの議論を参照したものである (Sacks, Schegloff & Jefferson[1974])。
- (4) 相互作用は単純なシステムで部分システムが生じにくい。たとえば、主題からはずれたことを小声で話すようなこともあるが、かなりの努力をしなければ持続力のある部分システムは確立できない (Luhmann[1984]263-4=305 頁)。しかし、これはゴッフマンが『集まりの構造』等で注目した事柄でもあった。

- (5) この自由と制約にかかわる議論の詳細は『制度としての基本権』の「自己表出の個人化」で確認できるが、これはゴッフマンの「相互行為儀礼」(Goffman [1967])の議論に対応するものを見いだせる。同様のことはルーマンの「道徳論」などについても言える(Luhmann[1978])。
- (6) 「したがって、ここで「システム形成の力能」と言われているのはシステムの時間的な持続性能のことにほかならない」とはどうしても思えない(小宮[2011] 82 頁)。なお、この部分の議論を深めるにあたっては菅原謙氏から示唆を受けた。もちろん、その解釈については私に責任がある。
- (7) だから、佐藤俊樹が指摘するように(佐藤[2008]82 頁)80 年代以降と以前でルーマンが相互作用システムの同定について考え方を変えているとは思えない。そもそも、われわれは互いに相互行為をなすにあたってその同一性をいちいち確認することなどめったにないはずだ。
- (8) ルーマンは、首尾一貫して相互作用システムでは、たとえ主題化されることがなくても、互いに「居合わせている」かどうかでシステム／環境の区別ができていると考えている(Luhmann[1984]617=831 頁)。そこに「居合わせている」ことがシステムの構成原理であるのはゴッフマンの議論を見ればわかるように経験上も恣意的なものとは言えない。そして、相互作用システムの「同一性」判断もこのシステム／環境の区別に依拠することなく行うことができない。互いの環境に位置する相互作用システムを連続したものとして扱うことができるのも、それが中断／再開した「相互作用」として「主題化」されるからである。ここで、参与者はシステム／環境の区別に依拠して「相互作用システム」の同一性判断を行うことになる。ただし、相互作用システムではこの二つが必ずしも一致するとはかぎらない。システム／環境の区別にもとづく以上、佐藤がこの点を疑問視して相互作用システムはシステムではないという理屈がわからないし、ルーマンの言及にさからって、佐藤が相互作用システムの成立要件に互いに「居合わせている」ことを含まないと解するのも理解できない(佐藤[2008] 101 頁)。
- (9) だから、ここに別の構造が登場していると考えする必要はない(小宮[2011]84 頁)。

参考文献

- 芦川晋 1998-99「自尊心・感情・アイデンティティーゴッフマンの記述を組織する期待と自己の構造－(上)(下)」『ソシオロジカル・ペーパーズ』7-8:1-25
- 芦川晋, forthcoming, 「自己に生まれてくる隙間－ゴッフマン理論から読み解く自己の構成－」『触発するゴッフマン(仮題)』新曜社

- 小宮友根 2011『実践の中のジェンダー法システムの社会学的記述』新曜社
- 酒井泰斗・小宮友根 2007 「社会システムの経験的記述とはいかなることか」『ソシオロギス』31:62-85
- 佐藤俊樹, 2000, 「『社会システム』は何でありうるのか——N. ルーマンの相互行為システム論から」『理論と方法』, 15 (1) : 37-48.
- 佐藤俊樹 2008『意味とシステム—ルーマンをめぐる理論社会学的探究』勁草書房
- 長岡克行 2006『ルーマン／社会の理論の革命』勁草書房
- Elias, Norbert, 1969, *Die hofische Gesellschaft*, Herman Luchterhand Verlag.
- 波田節夫・中埜芳之・吉田正勝訳『宮廷社会』法政大学出版局 1981
- Garfinkel, H., and Sacks, H., 1970, On formal structures of practical actions. In, H. Garfinkel (Ed.), (1986). *Ethnomethodological Studies of Work*: 160-193, Routledge and Kegan Paul
- Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G., 1974, A Simplest Systematics from the Organization of Turn-Taking for Conversation, *Language* 50 (4) : 696-735. 西阪仰訳「会話のための順番交替組織—最も単純な体系的記述」『会話分析基本論集—順番交替と修復の組織—』2010。
- Schegloff, E.A., Jefferson, G., and Sacks, H. (1977). The Preference for Self-correction in the Organization of Repair in Conversation. *Language*, 53 (2) : 361- 382. 西阪仰訳「会話における修復組織—自己訂正の優先性」『会話分析基本論集—順番交替と修復の組織—』2010。
- Simmel, Georg, 1908, *Soziologie*, Duncker & Humblot. 居安正訳『社会学』白水社 1994
- Simmel, Georg, 1917, *Grundfragen der Soziologie : Individuum und Gesellschaft*. 清水幾太郎／阿閉吉男訳『社会学の根本問題』岩波文庫 1979／教養文庫 1966。
- Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of the Self in Everyday Life*, Doubleday. 石黒毅訳『行為と演技—日常生活における自己呈示—』誠信書房 1973。
- Goffman, Erving, 1961, *Encounters : Two Studies in the Sociology of Interaction*, Bobbs-Merrill. 佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い—相互行為の社会学—』誠信書房 1985
- Goffman, E. 1963, *Behavior in Public Places : : Note on the Social Organization of Gatherings*. Free Press. 丸木恵祐・本名信行 (訳)『集まりの構造』誠信書房 1980.

- Goffman, Erving, 1967, *Interaction Rituals : Essays on Face-to-Face Behavior*, Doubleday (now by Pantheon). 広瀬英彦・安江孝司訳『儀礼としての相互行為－対面行動の社会学－』法政大学出版会 1986. 浅野敏夫『儀礼としての相互行為対面行動の社会学新訳版』法政大学出版会 2002
- Lyman, Stanford M. & Scott, Marvin B., 1968, *Accounts*, ASR 33-1.
- Luhmann, Niklas, 1964, *Funktionen und Folgen formaler Organisation*, Duncker und Humboldt. 沢谷豊・関口光春・長谷川幸一訳『公式組織の機能とその派生的問題 (上) (下)』新泉社 1992/1996
- Luhmann, Niklas, 1965, *Grundrechte als Institution*, Duncker & Humboldt. 今井弘道・大野達司訳『制度としての基本権』木鐸社 1989
- Luhmann, Niklas, 1973, *Vertrauen : Ein Mechanismus der Reduktion sozialer Komplexität (2. erweiterte Aufl. ed.)*. Ferdinand Enke Verlag. 大庭健・正村俊之訳『信頼』勁草書房 1990.
- Luhmann, Niklas, 1975, *Einfache Sozialsysteme, Soziologische Aufklärung 2 : Aufsätze zur Theorie der Gesellschaft*, Westdeutscher Verlag. 森元孝訳「単純なシステム」『社会システムと時間論? 社会学的啓蒙ニクラス・ルーマン論文集 3』新泉社 1986
- Luhmann, Niklas, 1975, *Interaktion, Organisation, Gesellschaft in Soziologische Aufklärung 2 : Aufsätze zur Theorie der Gesellschaft*, Westdeutscher Verlag.
- Luhmann, Niklas, 1978, *Soziologie der Moral*, Luhmann, N. and Stephan H. *Theorietechnik und Moral*, Suhrkamp.
- Luhmann, Niklas, 1980, *Gesellschaftsstruktur und Semantik : Studien zur Wissenssoziologie der modernen Gesellschaft I*, Suhrkamp. 徳安彰訳『社会構造と意味論 1』法政大学出版会 2011
- Luhmann, Niklas, 1984 *Soziale Systeme : Grundriß einer allgemeinen Theorie*. Suhrkamp. 佐藤勉 (監訳)、『社会システム理論 (上) (下)』恒星社厚生閣 1993/1995
- Luhmann, Niklas, 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft I & II*, Suhrkamp. 馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹訳『社会の社会 1-2』法政大学出版会 2009

本論文は 2011 年度中京大学特定研究助成の成果である。

